

特集1 海外で活躍してみよう!

留学、講義、ボランティアなど、新潟大学では学生の国際活動を支援しています。自分ひとりで全てを行わなくてはならない海外生活。この貴重な経験はみなさんを大きく成長させます。ここで、有意義な時間を海外で過ごし、多くのものを得た先輩たちの活躍を紹介。あなたも海外で視野を広げてみませんか。



マダガスカル

国際センター

新潟大学の学生たちの海外活動を支援する国際センター。今年9月8日~21日に教養科目「開発途上国の環境と開発事例研究」として、学生たちがマダガスカルを訪れました。その時の様子を紹介します。国際センター TEL025-262-7511

開発途上国と先進国の人間は、同じ人類社会の未来を共有している

国際センター教授 宮田春夫

昨年度から、教養科目「開発途上国の環境と開発事例研究」を試行しています。9月の2週間、現地政府機関、国際協力機構(JICA)やUNDP(国連開発計画)の事務所とプロジェクト等を訪問するものです。

「百聞プラス一見の力」一教室や書籍による知識に加えて開発途上国の現地を見て、現実に即して環境と開発を巡る先進国と開発途上国との関係を考えられることを目指す、3-4年生向け授業です。途上国には、学ぶべき多くのことがあり、一方で困難も抱えていることを学生が実地に理解し、同じ人類社会の現在と未来の共有の認識の下に考えられるようになることを期待しています。

履修生の経験を他の学生と共有すべく、報告会も行います。試験的授業なので、予算確保やリスク管理を含め、この種の授業を開講しやすい条件を作り、地球化社会で力を発揮する学生作りを展開すればと思っています。

土壌浸食対策に関するJICA開発調査の松本マネージャーからお聞きする。



暮らしている社会は違っても、生きている人々は変わらない

人文学部行動科学課程4年 小山 朗

成田空港からバンコクまで5時間、そこから飛行機を換え更に8時間半も離れたところにあるマダガスカルの首都アンタナナリヴ。鼻を刺す排ガスの臭いが漂うこの街で気がかったのは、物乞いをする人や、道端に寝ている人、道行く人にガラクタ同然に見えるものを売っている人などがいること。この国の生活の大変さを感じました。しかし日本人である僕から見て経済的に貧しいからといって、街の誰もが打ちのめされたような悲痛な顔をしているわけではありませんでした。“おはよう”と声を掛けると、“おはよう”と微笑みながら声を返してくれたり、人間的な温かさを感じました。こんな人々

を見ていて、僕は、どの国の人々も、自分たちの暮らしている社会の中で、自分たちらしく生きているということ、そしてその意味では、経済的な豊かさや貧しさにかかわらず、人々が日々の生活で感じていることは同じなのではないかと思いました。

動物園を楽しむ家族



越えられるものと越えられないもの

人文学部行動科学課程4年 橋本 芽

私がマダガスカルに行くことを決めた理由のひとつに、日本とは異なる国・地域、とりわけ途上国の実際の光景を見て、当たり前だと思っていた自分の価値観に揺さぶりをかけたいという気持ちがありました。

現地で嬉しかったことは、言葉が通じない片言でのやり取りだからこそ、相手と繋がるという率直な気持ちの人が関わる動機になったことです。肌の色や経済状況の違いを越えて相手との差を埋めようとする、人の持つ優しさに気づき、少し心が弾みました。逆に言葉に詰まったのは、首都から離れた地方の町でのこと。ある女性にマダガスカルをどう思いますかと聞かれ、いい表現が見つからなかった時です。環境が異なっても人と人とは繋がるのが出来ると感じる反面、衛生面やマラリアの危険性、インフラの違いを越えられない自分を自覚せざるを得ませんでした。複雑ではありましたが、貴重な経験になりました。



アンジュルベの町のホテリ(小さな食堂)で、NGOのFANAMBYの方(中央)と通訳の方(左)と一緒に昼食。

マダガスカルへ行って

理学部自然環境科学科3年 小林夏子

今回初めて発展途上国に行って、私は自分の国を今までよりも強く意識するようになりました。最初マダガスカルにいたときは、自分がたまたま日本に生れ落ちただけで、もしかしたら私もマダガスカル人のように生きていたかもしれない、と思いました。したがって『このまま日本で教育を受け、就職し、結婚する』というのは、果たしてよいのだろうかと感じ、日本からとにかく出ていくな国に行って活動したいと思うようになりました。しかし、不思議なことにマダガスカルから帰ってきてからは、逆に自分の国、自分の故郷から活動したいと思うようになりました。というのも、マダガスカルの環境政策を学びにいったはずなのに、マダガスカル人に日本の環境政策のことを聞かれると何も知らないと感じたからです。国籍不明なまま海外に行っても戸惑うだけかもしれません。これからはThink globally, act locally. で実践して行こうと思います。

環境事務次官を訪問。次官自らパワーポイントで説明して下さる。

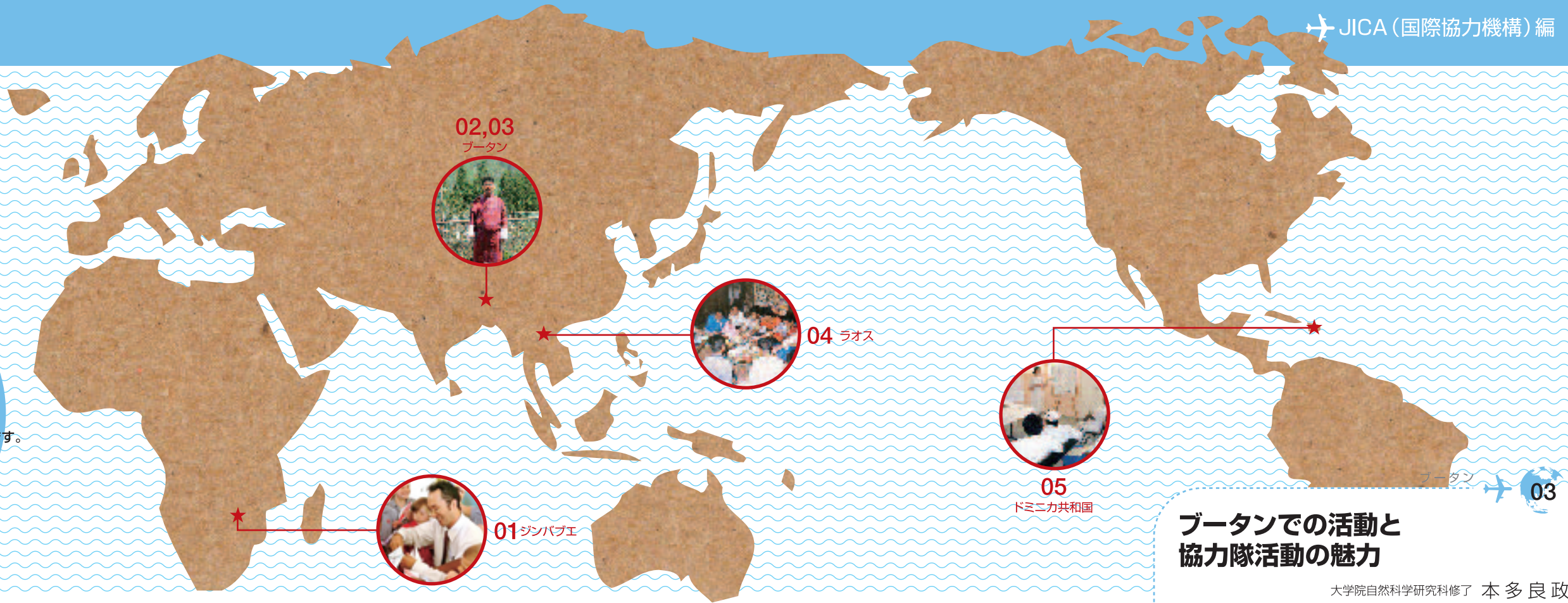


JICA

(国際協力機構)

JICAの青年海外協力隊に、
新潟大学を卒業した先輩たちが数多く参加しています。
先輩たちの体験談を紹介します。

JICA (国際協力機構)
<http://www.jica.go.jp/>



ジンバブエにおける「美術との対話」

大学院教育学研究科修了 五傳木浩樹

●派遣国:ジンバブエ ●職種:小学校教諭 ●派遣期間:平成15年7月～17年3月 ●修了:平成3年3月

大学卒業後、高等学校の美術科教諭として、十数年の年月が経ち、日常生活の中で何か物足りないものを感じていた。高校生に「美術」を教えていること、そして僕自身「美術作家」として歩んできた日々、ふと「美術とはいったい何なのか」という問いかけが脳裏から浮かび上がりいつまでも頭から離れなかった。そんな中、平成14年度からJICAの現職教員特別参加制度導入で、日本の現職教員が開発途上国でその培った指導技術や教授法を生かすことができ、さらに異国の地で生活しながら、習慣、文化、伝統を学び、自らも何かを得る機会があるという国際協力の現場を発見した。実は、僕自身、高校生の時に青年海外協力隊の応募説明会に参加したことがあり、今考えると、漠然と「夢」に持っていたこと、つまり海外で「何か」をするということが実際に実現できたという何かからの不思議な「縁」を感じている。

2003年7月から2005年3月まで僕はアフリカ南部に位置するジンバブエの首都ハラレのジンバブエ随一の名門小学校Highlands SchoolのArt Teacherとして活動した。ジンバブエは1980年に英国から独立した若い国であり、教育制度も英国式を踏襲している。しかし、驚いたことは世界の教

育現場では、ほとんどの国で「美術」つまり「Art」が存在しないことである。ジンバブエの小学校、約4800校のうち、Art Teacherが存在したのは、僕の活動先のHighlands Schoolだけであった。この学校はもともとA Schoolと呼ばれた白人学校で、教育内容もジンバブエでNo.1と言われていたが、現状はジンバブエ経済の悪化などで、画材が入手困難、手に入るもので美術教材を考え、授業実践をしなくてはならない日々であった。活動期間に実施した授業数は2300時間、これが僕にとっての大きな宝である。成功した授業もあれば、失敗した授業もある。子供たちの笑顔もあれば、退屈そうな顔もあった。

あの苦しくも輝いていたジンバブエの日々で、僕は何かしら「美術との対話」を感じたに違いない。人間にとって「生きる」ことが最優先の状況の中での「美術」とはいったい何なのか。教育現場での「美術」とは何なのか。現在、「五感を使った美術表現」という独自の教材を考え、日本の高校で授業実践している最中である。



ジンバブエ 01

誰を想い何かできること

教育人間科学部卒業 布施 大

●派遣国:ブータン ●職種:体育 ●派遣期間:平成15年7月～17年7月 ●卒業:平成15年3月

きっかけは一冊の本、隣にいる友人、家族なのかもしれない。日常にあるはずだ。

ブータンには、体育教育の歴史はなかった。私の業務は、地方の小中学校で体育授業を担当することであった。楽しいこと、苦しいこと、嬉しいこと、辛いこと…。あの2年間はものすごく濃い時間が流れていた。夢中だった。そして、すべてが貴重な経験になった。あの時間は私の財産である。

「自分のために、自分のやりたいことをやらない」と、学校でも家庭でも言われ続けた。私たちの世代は自己実現が賞賛される時代を生きている。私は、自分のために青年海外協力隊に参加した。帰国して思うのは、「誰かのために、何かすること」の素晴らしさである。「誰かを想い、何かできること」は、幸せなことである。「何を人生で求めるか」、そんなことが少し見えてきた2年間だった。

時々で良いと思う。学生時代に少しか「何を人生で求めるか」を、考えてもいいのではないだろうか。

ブータン 02

ブータンでの活動と協力隊活動の魅力

大学院自然科学研究科修了 本多良政

●派遣国:ブータン ●職種:建築 ●派遣期間:平成13年7月～15年7月 ●修了:工学研究科/平成7年3月 自然科学研究科/平成18年9月

インドの北東部に位置する小国ブータンで、学校や校舎の設計および既存図面の修正をしました。私の派遣の目的は、ブータンに建築家がいまいいないので建物の設計および建築家や技術者の技術的な支援をすることでした。ブータンでは文化の継承や街並の景観を保つために、建物の外観に伝統的なデザインや装飾を用いることになっており、その複雑なディテールを習得するのにかなり苦労しました。私が設計した建物は活動が終了するまでに完成しませんでした。今は、ブータンの風土に浸透した建物が建っていると思います。

活動中に作業の合理化をさせようとしたら、仕事を失う人が出てしまうからだめだといわれたことがあり、協力隊の活動により派遣国の社会や文化を気付かずに壊してしまうことがあります。現地の社会や文化を壊さずに新しい技術を浸透させ、その活動を社会の発展に結び付けるようにする。これが、協力隊の活動における醍醐味であると私は思います。



ブータンの民族衣装を着て仕事をしたときに。

2年間で得たもの

●派遣国:ラオス ●職種:農業土木 ●派遣期間:平成13年4月~15年4月 ●卒業:平成7年3月

私が青年海外協力隊に参加したのは、別段「貧しい国を助けてあげたい。」であるとか「自己鍛錬のため。」といった高尚な考えではなく、ただ「ラオスで働いてみたいから」という単純な理由でした。

私が住んでいた街は、電気は1日3時間、水道は断水してばかりという街。日本と比べると確かに不便かもしれませんが、それでは日本の方が幸せかと聞かれると、私には「そうだ」と明確に答えることはできません。2年間のラオスでの生活は、「物質的な豊かさ」=「幸せ」とは決して限らないということを私に教えてくれました。



朝の托鉢

異文化の中で働くことによって得るものは、人それぞれ違うでしょうが、協力隊の2年間で得たものは、一生の宝物になると思います。動機はどんなものでも構いません。興味のある人は実際に参加してみることをお勧めします。最後に、現地でいつも助けてくれたラオス人の友人、私の赴任中に遠く離れたラオスまで遊びに来てくれた大学生時代の友人諸君に感謝しています。本当にありがとう。



農村での儀式

法学部法学科卒業 井川文男

援助する側こそが 学ばせてもらってる、協力隊活動

●派遣国:ドミニカ共和国 ●職種:助産師 ●派遣期間:平成16年7月~18年7月 ●修了:平成10年3月

私は東京の病院に6年間勤めていたのですが、以前からの夢だった途上国での医療活動に関わりたく、病院を退職し協力隊に参加しました。派遣先は地方の公立病院で、看護助手たちと一緒に働きながら、検温の講習会、分娩室の環境改善、分娩器具の消毒法の改善などに取り組みました。着任当初、看護師の役割の違い、文化習慣の違いに戸惑い、また患者の立場が相当低いことに愕然としました。「それは日本の話。ここは違う」と話を聞いてもらえず、悔しい思いもしました。振り返ってみると、協力隊として援助にいったというよりも、ホストファミリーや同僚から助けてもらうことが多く、ドミニカ人の大きな懐を借りて、多くのことを学び経験させていただいたと思います。協力隊の2年間は資格技術習得や留学とはちがうので、この経験を自分なりにどう活かすかが今後の課題です。海外での活動に興味のある人はぜひ協力隊参加にチャレンジされたらよいと思います。



病院での講習会

医療技術短大部助産専攻科修了 桐生美恵子

実効性のある国際交流の必要性

災害復興科学センター教授
青山清道

私は新潟大学に奉職して40年に達し、この間、自然災害発生後の復興戦略や、平素からの防災対策確立に向けた研究を現在にわたって継続している。専門領域は地盤防災工学と雪氷防災工学であるが、この関係で地すべりや雪崩等の斜面災害と凍上被害、また、特に冬期に発生する地震災害の現場を見てきた。先端的な防災技術を有するわが国への関心が高まり、多くの留学生が来日し、将来的な技術指導者を養成するべく、人材育成が図られている。しかし、教える側の課題として、自らがどれだけ国際的な感覚を有しているかが重要であると痛感している。

私は1968年から1971年にかけて、JICAの派遣専門家としてアフリカのナイジェリア、1980年から約1年間は当時の文部省在外研究員としてカナダ、ケベック州のモントリオールに滞在した。ナイジェリア、ヤバ工科大学時代には、土質試験装置が不十分で、苦勞して自作した思い出がある。これ等の経験から、わが国の進んだ技術への学生達の熱い眼差しがひびひと感ぜられた。同時に、英国からの独立間もない10年であったためにフォート・ボンダの影響が強く、単位系で苦戦した。一方、イギリスとフランスの影響を強く受けているカナダでは、耐寒・防雪に配慮した都市計画に関する知見を得ることが出来た。ただ、わたくしが在籍したマギル大学では英語で講義や議論が行われていたが、街中ではフランス語が多用されたために往生したものの、生活習



ナイジェリアへの技術協力
(1968年~1971年)



ビアフラをめぐる内戦で破壊されたトラス橋

慣や考え方の多様性に触れたことを通じて、国情に応じた技術教育の重要性を実感した。もちつもたれつ、自国の得意分野を他国の社会還元結び付けることを、研究生活の柱に据えるようになり、1970年代初頭より毎年のように海外の国際会議や各種調査に参加している。

災害は繰り返す足元に忍び寄り、1986年1月に新潟県能生町の柵口での雪崩

で13名が犠牲となった。風水害では、ここ数年だけでも2000年9月の東海豪雨、中越地震の3ヶ月前に起きた7.13水害、2005年12月には山形県の羽越線での突風による脱線、2006年7月末は岡谷・辰野方面を襲った土石流での中学生の犠牲等、痛ましい事実を突きつけている。地震でも内外を問わず犠牲者が発生し地震防災は、国際協力の主要課題である。建築研究所が取り組む地震工学者の養成コースが目される中、各大学でも留学生を増加させつつある。現在、約360人の留学生を抱える新潟大学でも、学生ニーズに応じたきめ細かい教育カリキュラムの提供とともに、生活に必要な経済的支援の充足を指摘し、国際協力への提言をしたい。